

「しめる・しまる・とじる・ふさぐ・ふさがる・とざす」

加藤 和夫

1. はじめに

私達は、「窓をしめる」「窓をとじる」「窓をふさぐ」「窓をとざす」という表現で、ほぼ同一の場面を想像することが出来る。簡単に言えば、それは、それまで開いていた窓を〈閉鎖〉状態にすることである。しかし注意して見れば、これら四つの文は何らかの意味的差異を有している。そして、それらは結局四つの動詞の意味的差異に起因するものと考えられる。

よって本稿では、上記四語を中心に、いわゆる〈閉鎖〉という状態にかかわり、互いに類義関係にあるとみられるいくつかの動詞をとり上げ、その意味分析を試みる。

『分類語彙表』^(注1)では、〔2.155〕閉閉〕の項中〔閉〕に分類されるものとして、「しまる・しめる・とじる・とざす・封する・(戸を)たてる・つむる・つぶる・つぐむ」の九つの動詞を掲げているが、以後の分析では、その中の「しまる^(注2)・しめる・とじる・とざす」に「ふさぐ・ふさがる^(注3)」を加えた六語を中心に扱う。その他のものについても、そのつど出来るだけ言及することとしたが、意味分析を深めるひとつの手段である反義語との関係にまでは及べなかった。

2. 他動詞しめる・とじる・ふさぐ・とざす

本稿で分析の対象とする六語を他動詞・自動詞の別でみると次頁の表のように分けられる。

これから明らかかなように、六語のうち「とじる」「ふさぐ^(注4)」は他動・自動詞の両性格を有するものである。反対に「とざ

す」はそれに対応する自動詞を持たない。

他動詞	しめる		ふさぐ	とじる	とぎす
自動詞	しまる	ふさぐ	ふさがる	とじる	

ここではまず、煩雑さを避けるために他動詞で代表させて、その意義特徴を探る。他動詞の意味が分析出来れば自

ずと自動詞の意味も明らかになるであろう。

以下、「～をしめる」「～をとじる」「～をふさぐ」「～をとぎす」のセンテンスに、つまり「を」格をとる部分にいろいろな名詞を入れてみる。

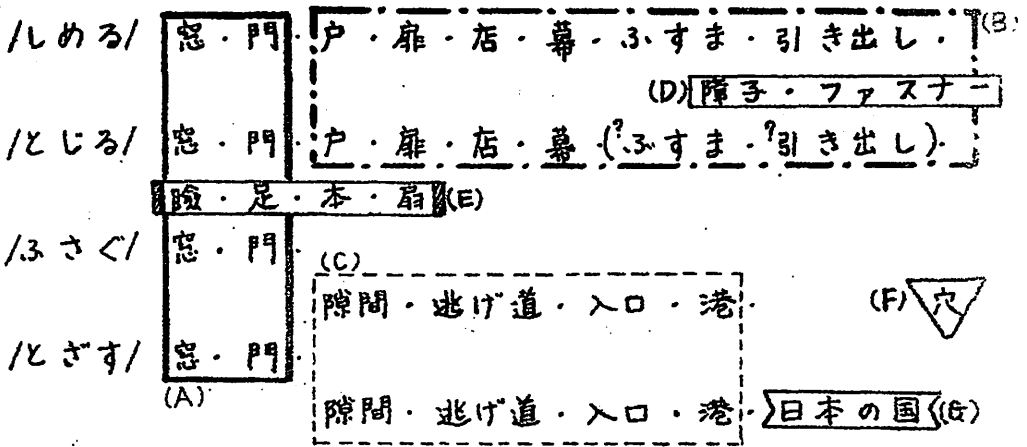
- | | |
|--------------|------------------|
| (1) 窓をしめる。 | (21) 幕をしめる。 |
| (2) 窓をとじる。 | (22) 幕をとじる。 |
| (3) 窓をふさぐ。 | (23) ×幕をふさぐ。 |
| (4) 窓をとぎす。 | (24) ×幕をとぎす。 |
| (5) 門をしめる。 | (25) ぶすまをしめる。 |
| (6) 門をとじる。 | (26) ?ぶすまをとじる。 |
| (7) 門をふさぐ。 | (27) ×ぶすまをふさぐ。 |
| (8) 門をとぎす。 | (28) ×ぶすまをとぎす。 |
| (9) 戸をしめる。 | (29) 引き出しをしめる。 |
| (10) 戸をとじる。 | (30) ?引き出しをとじる。 |
| (11) ×戸をふさぐ。 | (31) ×引き出しをふさぐ。 |
| (12) ×戸をとぎす。 | (32) ×引き出しをとぎす。 |
| (13) 扉をしめる。 | (33) 障子をしめる。 |
| (14) 扉をとじる。 | (34) ×障子をとじる。 |
| (15) ×扉をふさぐ。 | (35) ×障子をふさぐ。 |
| (16) ×扉をとぎす。 | (36) ×障子をとぎす。 |
| (17) 店をしめる。 | (37) ファスナーをしめる。 |
| (18) 店をとじる。 | (38) ×ファスナーをとじる。 |
| (19) ×店をふさぐ。 | (39) ×ファスナーをふさぐ。 |
| (20) ×店をとぎす。 | (40) ×ファスナーをとぎす。 |

- | | |
|----------------|------------------|
| (41) × 臉をしめる。 | (61) × 逃げ道をしめる。 |
| (42) 臉をとじる。 | (62) × 逃げ道をとじる。 |
| (43) × 臉をふさぐ。 | (63) 逃げ道をふさぐ。 |
| (44) × 臉をとざす。 | (64) 逃げ道をとざす。 |
| (45) × 足をしめる。 | (65) × 入口をしめる。 |
| (46) 足をとじる。 | (66) × 入口をとじる。 |
| (47) × 足をふさぐ。 | (67) 入口をふさぐ。 |
| (48) × 足をとざす。 | (68) 入口をとざす。 |
| (49) × 本をしめる。 | (69) × 港をしめる。 |
| (50) 本をとじる。 | (70) × 港をとじる。 |
| (51) × 本をふさぐ。 | (71) 港をふさぐ。 |
| (52) × 本をとざす。 | (72) 港をとざす。 |
| (53) × 扇をしめる。 | (73) × 穴をしめる。 |
| (54) 扇をとじる。 | (74) × 穴をとじる。 |
| (55) × 扇をふさぐ。 | (75) 穴をふさぐ。 |
| (56) × 扇をとざす。 | (76) × 穴をとざす。 |
| (57) × 隙間をしめる。 | (77) × 日本の国をしめる。 |
| (58) × 隙間をとじる。 | (78) × 日本の国をとじる。 |
| (59) 隙間をふさぐ。 | (79) × 日本の国をふさぐ。 |
| (60) 隙間をとざす。 | (80) 日本の国をとざす。 |

2.1. 対象物の特徴からみた意味

それでは、それぞれの動詞の意義特徴を明らかにするため、まず(1)~(80)の文例にみえる二十の対象物の特徴を考えることにする。そこで、四つの他動詞が「を」格としてとり得たものを、その各々について整理すると次頁のようになる。

これからわかることは、(A)窓・門を除くと、(B)において「しめる・とじる」は類義性が高く、(C)において「ふさぐ・とざす」は共通の対象物を取り得ることである。



(B)に含まれるもののうち「店」を除いたものは、例えば板戸・ガラス戸という《具体物そのものである》。一方、(C)に含まれるものは、《対象物そのものの、あるいはそれを含んだ空間である》。この事実は、(A)の部分にもはっきり表われ「ふさぐ・とさす」が対象とする、窓・門とは、それぞれ窓という空間・門という空間であるし、「しめる・とじる」が対象とするのは多くの場合、移動することの可能な《具体物》窓であり門である。ただし、「とじる」については、「ふさぐ・とさす」同様、窓・門という空間も対象とし得る。この点で「しめる」と「とじる」の意義特徴の差がひとつ確認出来そうである。もっとも、(B)の店については「しめる」も(81) × 口をしめる。 (83) × 目をしめる。
(82) 口をとじる。 (84) 目をとじる。
えるわけで、この店というものをどう捉えるか難しいところである。

2.1.1. ふさぐ・とさす

では、(C)で共通の対象をとる「ふさぐ」と「とさす」の意味的差異を、(F)(G)の事実も参考にしながら明らかにしていきたい。

例えば、文例(71)(72)の二つを比較してみるとうか。

(71)は、(71)「たくさんの船が港をふさいでいる。」のように、
《港という範囲・空間を船が埋めつくし、他のものの入り込む余地を残さない》状態である。この場合、船の集合をひとつの大きな面とみることも出来るが、(F)=(75)の例のように立体的な場合もあることは、「とがす」と区別される特徴のひとつである。

(75) 塀の穴を粘土でふさぐ。

(75) 抜け穴を土でふさぐ。

そして、そこでは、船・粘土・土といった、《ある空間・場所を埋めるための何かを必ず必要とする》。その何かは必ずしも具体物である必要はない。次の例がそうである。

(85) 責めをふさぐ。

「ふさぐ」のこうした意義特徴は、「つめる」の持つ意義特徴と重なっており、次の二文は全く同意となる。

(86) 穴をコルクでふさぐ。

(87) 穴にコルクをつめる。

つまり、そこには穴の大きさとコルクの大きさが全く一致した密閉状態があるわけである。しかし、「ふさぐ」においてはその密閉性が必ずしも客観的事実である必要はなく、判断をする人の主観による部分をも含めていることが、「つめる」との違いのように思われる。

以上から、「ふさぐ」の意義素を次のように設定する。

ふさぐ 《対象物の有する空間・場所を何かで埋め、他のものの出入する余地を残さないようにする》

では、(72)を例に「とがす」の意味について分析をする。

(72) 港の入口を鉄の扉でとがす。

(72) 鎖国令を出して港をとざす。

さて、(72)の例のみではわかりにくいので、今新たに(72)(72')の文を掲げた。この二文から、「とざす」の意義特徴はかなり明らかとなる。

(72')では、文字どおり港の入口の部分に鉄の大きな扉を置くことで港への船などの出入りを不可能にすることである。一方、(72)では、実際に鉄の扉とかいう具体的遮蔽物がなくても、鎖国令という法律によって港への船の出入りを禁止する、ひいては国交を断つということになる。つまり、これらから言えることは、「とざす」という動詞の意義特徴が《何ものかの移動を遮断する》ところにあるのであって、それがどのような状態で行なわれようと直接意味の本質にはかかわらないということである。このことは(60)-(64)-(80)および(1)(2)の文例においても矛盾するものではない。そして、「とざす」のこの意義特徴が、「口をとざす^(注5)」という表現に「決してものを言わない」という意味を生じせしめていると考えられる。

そこで、「とざす」の意義素を次のように設定する。

とざす《対象物そのものの有する、および対象物を含んだ空間・場所に(平面的)遮蔽物をおくことで、その空間・場所を移動しようとするものの動きを断つ》

ここで平面的と言ったのは、「ふさぐ」の意義特徴と異なる部分を明示するためで、そのことについて別の例で今少しわかりやすく説明しよう。

(88) 雪が北陸の町をとざす。

(88)では、実際の場面としては、たくさんの雪が北陸の町に降り積り、町全体をふさいでいるところが思い浮かべられるが、たとえばメートルの積雪があろうと、そこで町が正常な機能を果たしていればとざしたことはない。要するに、積雪の状態がどうあれ、町が正常に機能することを断つある

平面、この場合なら北陸のある町のエアリアを境するある平面というものをそこに想起させるのである。

なお、(G)と関連して(79)が言えないというのは、それが現実的に起り得ないという意識によるのであって、もし日本の国全体をふさいでしまうようなものが存在すれば言えるはずである。

2.1.2 しめる・とじる

これら二語について既に明らかになっている部分を今一度くり返すと、「しめる」「とじる」が対象とするのは多くの場合、移動することの可能な《具体物》であるが、「とじる」については、例えば窓・門という空間をも対象とし得るということであった。ただし、このことは後述べるアスペクトの部分と関連すると思われるので、詳しくはそこで述べることにする。

そこで、ここではまず両他動詞のとする目的語の特徴から、それぞれの意義特徴を探ることにする。

先程整理した(A)~(G)をもう一度見てみよう。今これら二語にかかわるのは(A)~(E)ということになる。(A)・(B)に含まれるものについては、後述されるアスペクトを問題にしなければ、「しめる」「とじる」ほぼ同じ意味を有すると考えることが出来そうである。しかし、(D)障子・ファスナーについては明らかに「とじる」は言えないし、逆に(E)臉・足本・扇については「しめる」が言えないという事実が一方に存在する。そこで、この(D)(E)の部分に何とかして二つの動詞の意義特徴の差を見い出そうと分析を試みた。しかし、その差を見い出すことはそう容易なことではなかった。

ところが、分析を続けているうちに大きな誤りに気付いたのである。これまでの分析では、(注1)にも書いたとおり、「

「しめる」「しまる」の多義性を扱うことで分析を難しくしたくないとの単純な理由から、いわゆる「縛・絞・搾」などの漢字のあてられる「しめる」「しまる」の意を排除してきた。しかし、実際にはこれらの漢字のあてられる意味が「しめる」本来の意味で、「閉」の意はその本来の意味から派生したものであることに気付いたのである。

そこであらためて (D)(E) を見ると、おぼろげながら「しめる」と「とじる」の意義特徴がうかび上がってくる。

(E) の「^(注6) 險・足・本・扇」について考えてみよう。これらの対象において反義表現となるものは、それぞれ以下のものである。

- | | | |
|-------------|-----|---------------|
| (89) 險をひらく。 | cf. | (93) × 險をあける。 |
| (90) 足をひらく。 | | (94) × 足をあける。 |
| (91) 本をひらく。 | | (95) × 本をあける。 |
| (92) 扇をひらく。 | | (96) × 扇をあける。 |

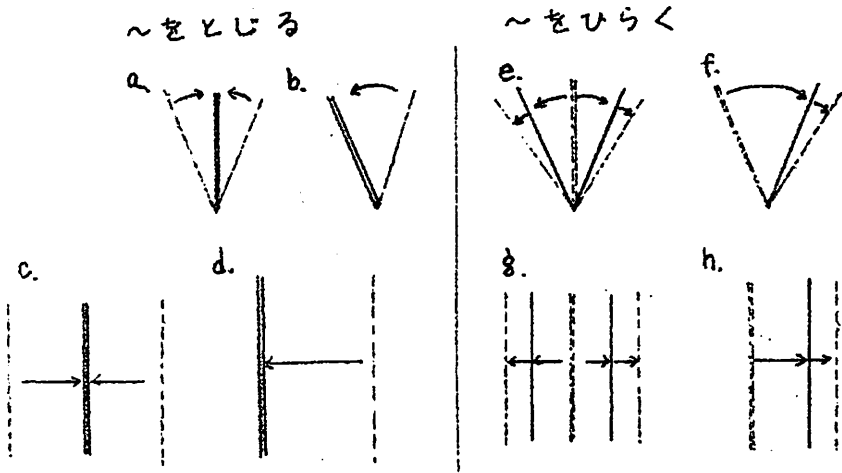
それに対し、(D) の「障子・ファスナー」では、「ひらく」は言えず、「あける」が可能となる。

- | | | |
|-----------------|-----|--------------------|
| (97) 障子をあける。 | cf. | (99) × 障子をひらく。 |
| (98) ファスナーをあける。 | | (100) × ファスナーをひらく。 |

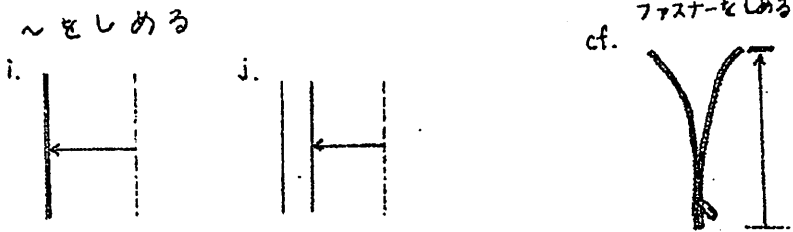
従って、(A)(B) という共通部分を無視すれば、「しめる」と「とじる」はその反義語「あける」「ひらく」とともに、その対象によって明確に使い分けられていることとなる。この事実は、「しめる」「とじる」の意義素を立てる上で実に重要である。

初めにことわったように、本稿では紙数の関係上反義語との対照分析にまでは及べなかったのであるが、奇しくもここで反義語との関係から意味分析のきっかけを得たのである。

(42)(46)(50)(54) でその対象物の運動を略図化すると次頁左のようになり、(89)~(92) では右のように表わせる。



これに対して、(33)(37)における対象物の運動は下のよう
に示される。



i・jで表わされる運動が結局、「しめる」の本来的意味である
「締める」「搾める」等の意義特徴ということになる。

- (101) 首をしめる。
- (102) 帯をしめる。
- (103) 三味線の糸をしめる。
- (104) ホルトでしめる。

そこで以上のことを整理して「しめる」・「とじる」それぞ
れの意義素を設定する。

しめる《あるものをあるものに移動・接近させ、その間隔を
せばめる》

この場合、その《間隔をせばめる行為》は途中で中止され
てもよいが、99くの場合については密着した状態となり、さら

にその行為が継続されれば、その目標物の性質（弾性の有無等）によって(101)のようにもなり、当然そこには単なる移動・接近では必要とされない強い力が要求されてくる。

それに対し、「とじる」の意義素は次のように立てられるに違いない。

とじる 《ある空間を隔てて存在する二つのもののうち、いずれか一方を、あるいは両方ともを移動・接近させ密着した状態にする》

つまり、「とじる」ではそこに既に二つのものの密着状態の完了の意を含んでいることが注目される。このことについては次のアスペクトのところで今少し述べる。さらに、「とじる」の場合、その密着部分は多く直線として現われ、その密着部分を含めた平面を形作る。ただし、「足をとじる」「扇をとじる」など例外も多い。

このように見てくると、「しめる」「とじる」の意味分析の矛がかりとした(E)において「しめる」が言えなかったのは、前章に略図化したもののうち^(注7)αとβに相当するものを「しめる」が意義素として持っていなかったためとわかる。しかし今なお疑問として残るのが、(D)の「障子」について何故「とじる」が言えないかということである。運動の内容から考えると当然言えてもよいはずなのであるが、何か別の理由があるのかもしれない。(26)(30)が幾分すわりの悪さを感じさせながらも言えそうだということから見れば、?でも付けた方がよかったのかもしれない。また、あるいは「しめる」に比べて「とじる」が文章語的^(注8)であるといった性格が、日本人の生活史ともかかわって、このような用法の制限を生んだのかもしれない。

3. アスペクトからみた意味

これまでも時折ふれてきたように、ここでも意味分析の対象とした四つの動詞については、アスペクトについてみても違いのあることがわかる。既に述べたことと重複する部分があるかもしれないが、一応整理しておく。

それぞれの動詞に「～ている」を付けると、「しめている」「とじている」「ふさいでいる」「とさしている」となるがこれらのうち、「しめている」はまさに現在「しめる」という動作の継続していることを意味する。一方「とじている」は継続態・結果態ともに表わすことが出来る。

- (1) 彼は門をとじている。…継続態(進行態)
- (2) あの家は門をとじている。…結果態(完了態)

この「しめる」「とじる」のアスペクトについての特徴は次の複合動詞の形態にも反映していると思われる。

- (3) 窓をしめきる。
- (4) × 窓をとじきる。
- (5) × 人を部屋にしめこめる。
- (6) 人を部屋にとじこめる。
- (7) 引きしめる。
- (8) × 引きとじる。

そして、「ふさいでいる」は「しめている」と同様継続態のみ、「とさしている」は結果態をのみ表わす。

これらの特徴は全て、これまでに分析した意義素から生じたものであって、それらと矛盾することは決してない。

初めのところで若干問題として残された(17)・(18)の例も、「店をしめる」で《その日の営業を終わる》のニュアンスが強く、「店をとじる」が《商売をやめる/廃業する》のニュアンスが強いのも、アスペクトとかかわっているのかもしれない。

4. 自動詞しまる・とじる・ふさがる・ふさぐ

自動詞四語についても他動詞と同じく、ひとつひとつ分析をして意義素をたてるべきであるが、本稿で対象とした動詞については、自・他の別はあってもそれが中心的意義特徴を変えるものではない。従って、ここでは、各々の動詞の持つ意味から、「～がしまる」「～がとじる」の構文で「～が」にあたるものに、他動詞のとった目的語と必ずしも一致しない場合があることから、それらについて若干の説明を加えるにとどめたい。

「ふさがる」の場合は、他動詞「ふさぐ」に対して用法の拡大がある。それは以下の文例にみられるようなものである。

- (1) 急用で今週の土曜日がふさがる。
- (2) 手がふさがっていて協力できない。
- (3) 満員で全ての席がふさがっている。

(1)～(3)において自動詞を他動詞に変えた表現は出来ないわけである。このことは、「ふさぐ」と「ふさがる」における本質的意味の違いではなく、「～がふさがる」のもつマイナスの価値が、自らあえて「～をふさぐ」という行為を実現させないことによるのであろう。

しまる《あるものがあるものに移動・接近し、その間隔がせばまる》

とじる《ある空間を隔てて存在する二つのもののうち、いずれか一方が、あるいは両方がともに移動・接近し、密着した状態になる》

ふさがる《対象物の有する空間・場所が何かで埋まり、他のものの出入りする余地がなくなる》

なお、「ふさぐ」については(注4)を参照されたい。

5. おわりに

以上で簡単ではあるが、本稿でとりあげた閉鎖動詞の意味分析を終える。決して十分な分析が出来たとは考えておらず、むしろ、分析を深めれば深めるほど意味という抽象物を捉えることの難しさを痛感した。しかし、いずれにせよ従来の国語辞書の記述内容と比較して、はるかにその意味分析は進んだものと確信する。ただ、その意味分析の方法については、未だ不十分の詭りをまぬがれまい。ひとえに大方の御叱正を請う次第である。

(注1) 『分類語彙表』127頁(国立国語研究所資料集6 昭39 秀英出版)

(注2) 「しめる」「しまる」では「閉める」「閉まる」以外にも、「締・搾・絞」の漢字のあてられる意味が含まれ、多くの国語辞書では、これらをひとつの項としてまとめて記述している。「しめる」「しまる」の意味分析をするためにはそれらすべてを対象とするのが基本的な態度であるが、初めのうちはとりあえず「閉める」「閉まる」のみについて分析をすすめる。

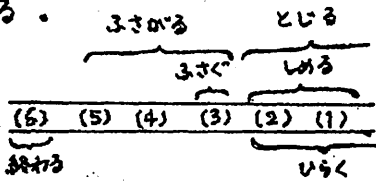
(注3) 『分類語彙表』(前出)では、他動詞「ふさぐ」・自動詞「ふさがる」を〔2.1565 防ぎ・ふさぎなど〕(128頁)に、自動詞「ふさぐ」を〔2.301 気分・情緒〕に分類しているが、ここでは〔2.1553 閉閉〕と類義とみなしてとりあげた。

(注4) 自動詞「ふさぐ」は、その用例が、「受験に失敗してふさいだ顔をしている」のように、「心理的に何か引、かかることがある、憂うつで沈んだ気持ちになる」というような場合にのみ限られている。よって、自・他両方を備えると言っても、「とじる」

とはかなり性格を異にするものである。

(注5) 「口をとさす」が《黙して決してものを言わない》意を表わすように、やはり同意を表わすものとして「口をつぐむ」という表現がある。この他動詞「つぐむ」は、その目的語に「口・唇」しか取り得ない特殊なものであり、そこには必ず主体の意志が介在する。これと同様のことが、目的語に「目・瞼・瞳」しか取り得ない「つぶる(つむる)」についても言える。慣用的に「目をつぶる」は《見て見ぬふりをする》の意も担っている。

(注6) 一般に、「しまる」の反義語とされている「あく」については、『動詞の意義の記述的研究』(国立国語研究所報告43 宮島達夫 昭47 秀英出版)の607~616頁にかなりの分析がされているので参照していただきたい。なお、近刊の『基礎日本語 意味と使い方』(角川小辞典7 森田良行 昭52.11 角川書店)では、その15~18頁で「あける」の意味分析が試みられており参考となる。本稿の分析結果と一致する部分も多い。その中で森田氏は、「あける」の反義語と意味の関係にも若干ふれ、以下のような図を示している。



ここで、(1)~(6)は「…ヲあける」「…があく」の「を/が」の格に入る語で、列

挙すると、(1)戸・ふすま・障子・扉・戸・蓋・窓の口・幕・ファスナー・本・ページ、(2)窓・目・口・箱・袋・封筒・かん詰め・店、(3)穴・隙間、(4)日曜日・午後・体・手、(5)(コップの)ビール・(バケツの)水・(袋の)米・中身・グラス・バケツ・入れ物・部

屋・家・席，(6)梅雨・夜・年・休暇・年期、の以上である。

(注7) 「「窓を開く」「扉を開く」が「あける」と違って蝶番がによる戸を連想するのはこのためである。「両開き」「観音開き」などの例も参考にしたい…。(以下略)」(『基礎日本語 意味と使い方』前出)17頁下段

(注8) 「『文体』「とじる」「とさす」は文章語的で、特に「とさす」はその傾向がよい。」(『類義語辞典』徳川宗賢・宮島達夫 昭47 東京堂)192頁上段

【付記】 この稿の下書きを終えた段階で、幸い大西実氏の論文「日英両語開閉動詞の意義素」(『静岡英和女学院短期大学紀要第4号 昭47)を見ることが出来た。氏はその中で「トジル」「トザス」「シメル」「シマル」の意義素を次のように示している。

トジル：《二つの膜状のものが接続し区切りがつく
(ようにする)》

トザス：《膜状のものを立体物の表面に密着させ出入りをおさえる》

シメル：《線状のものをあるものにかからみつけ引く
あるいは押して接続させゆるまないようにする》

シマル：《線状のものがあるものにかからみつき引かれるあるいは押されて接続しゆるまないようになる》

これらは内容的にかなり本稿とは違ったものとなっている。意義素をどう立てるかそれ自体問題ではあるが、大西氏の分析には納得出来ない部分も多い。今後、「あける」「ひらく」等の反義語も分析の対象として、本稿の内容を再検討していきたいと考える。

参考文献

- 国立国語研究所 『分類語彙表』 1964 秀英出版
国立国語研究所 『動詞の意味の記述的研究』 1972 秀英出版
日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1972~1976 小学館
徳川宗賢・宮島達夫 『類義語辞典』 1972 東京堂出版
柴田武他 『ことばの意味』 1976 平凡社
森田良行 『基礎日本語』 1977 角川書店
国広哲弥 『意味の諸相』 1970 三省堂
大西 実 『日英両語開閉動詞の意義素』 1972 静岡英和女
学院短期大学紀要第4号

言語経歴：1954年5月 福井県武生市生まれ

～18歳 武生市

18～22歳 福井県福井市

22歳～ 横浜市中区在住